

親鸞聖人と涅槃經

横 超 慧 日

一

經典は仏説である。仏説の經典の中に余り多くの異説が見られるから、そこで仏陀の真意は何処にあるかを追究し、その結果、見出された仏陀の真意と自己の能力とを見比べて、そこに色々の意見が分かれることになった。それがいわゆる宗派の成立である。だからどの經にせよ、一つの經は一宗派にのみ結びつき、一つの宗派は一つの經だけで成立しているというものではない。今日では『法華經』といえば日蓮宗の独占であるとか『観無量壽經』と言えば浄土教だけのものであるとかいうように、一つの經典だけで一つの宗派は成立し、その經典に対しては或る特定の宗派のみが唯一の正しい見解を持つように考えられ勝ちである。だが『法華經』に対しては日蓮宗以外に、涅槃宗、天台宗、三論宗、法相宗、華嚴宗、等々と皆夫々の見方があった。浄土教の人には浄土教の立場からの『法華經』に対する見方があるはずであり、『法華經』に対する見解は日蓮宗だけが正しくそれ以外は誤りだということは客観的に論証され得るものではないし、又すべきものでもない。同様のことは逆に『観無量壽經』に対する浄土教以外の人々の見解についても言えることであろう。『観無量壽經』についても古来種々の見方があった。我々は、結局それらの中でどの説が正しいかという問題を問題にすべきではなく、自分の力からふり返って見る時、どのようにしか信じられぬか、自分に信じられ得る道は此

しかないという、そういう道を探し求めるべきであろう。

今私は、ここに親鸞聖人と『涅槃經』との関係を考えてみようと思う。『涅槃經』という経は特別に浄土往生を勧めている経でなく、又阿弥陀仏のことを多く論及している経でもない。それ所でなく、念仏者を以て謗法の徒輩だと非難した日蓮上人なども『涅槃經』に対しては深い関心を以て信奉しておられたようであり、あの強烈な折伏思想も実は『涅槃經』の説に負う所が多かったようである。それにも拘らず私がここで特に親鸞聖人の信仰と『涅槃經』との関係を問題にしようとするのは何故かというに、まず第一に『教行信証』の中で『涅槃經』の引用が甚だ多いことである。前後凡そ三十三回に及び、同一経文を重ねて引用されていることもある。第二にその引用は単に対外的な意味で自説を証明するためというようなことでなく、深い胸奥からにじみ出る感慨を以て綴り合わされている。第三には『浄土和讃』の中に「諸経のころによりて弥陀和讃」という九首の和讃があつて、その九首の中四首は実に『涅槃經』の意に因るものであつた。第四に今高田派の専修寺の宝庫に親鸞聖人自筆の「大般涅槃經要文」という経抄があつて、聖人が長い四十巻の『涅槃經』を精讀し、感銘の深い箇所三十五文（数え方によっては十六文）を抄出しておかれた事実がある。第五には聖人はもと比叡山で学ばれたというのに、比叡山の天台宗で正依の経とする『法華經』は一回も『教行信証』中に引用されていないが、その事実と関連して考える時『涅槃經』だけが特に重視せられたというのはどういふわけか。以上のようなことを思い合せる時、親鸞聖人と『涅槃經』との関係は、是非とも考えてみなければならぬ課題となってくる。聖人の信仰が何であるかを知るには、聖人の著作だけを精読して足るであろう。然し聖人の信仰が如何にして導き出されたかを考えようとするには、もう少し立入ってその背景を推察しなければならぬまい。それで以下日本仏教史の中で『涅槃經』がどのような地位を占めてきたか、天台宗の中では本来『涅槃經』が『法華經』とどんな関係におかれていたか、浄土教の中では『涅槃經』が特別に重視されたことがあつ

たかどうか、聖人の『涅槃經』觀の特色はどんな所に認められるか、等の諸点につきあらまし所見を述べてみたいと思ふ。

二

先ず、日本仏教史の中で『涅槃經』がどのような地位を占めてきたかというに、専ら中国仏教の移入に努めた奈良時代のことは暫く置く。事实上、日本仏教の開祖ともいふべき伝教大師最澄は、今日でこそ天台宗の祖師としてその宗派だけの立場から見られることが多いけれども、大師の畢生の念願は、一乗仏教と三乘仏教と何れが仏陀の本意であるかを決判し、一乗仏教こそ全仏教の帰結であるからその精神に立つて日本の全国民を大乘菩薩道に進ませるようになしたということであつた。そのために三乘仏教を以て正義とする法相宗の徳一との間に激しい論争が繰り返された。その論争は精密を極め相互に批判が交えられたが、その場合、共通の場として引用された權威ある聖典は『法華經』と『涅槃經』とである。『法華經』は一乘眞実の根本聖典であり『涅槃經』は一切衆生悉有仏性の論拠とせられる所である。それ故に、伝教大師は、天台・三論・華嚴等の諸宗共通の立場を参照しつつも、特に天台宗を根本として強く一乗成仏を主張した。然し之に對する徳一は、法華の一乗は不定性の二乗という特殊な人々を対象にした密意の説であるから、これを以て一般的に二乗成仏の根拠とすることはできぬ。又人には五種姓と言つて先天的に成仏の種子を具有するものとそれを具有しないものとの區別があるから、たとい『涅槃經』の中に悉有仏性と言われていても、それを文字通りに理解すべきでない。現に『涅槃經』の中には、二乗が成仏すると説く弟子があつたならばそれはわが仏意を理解していないものであるといひ、又良医に遇つても遇わなくてもどうしても治らぬ病人というものがあつたといひ、譬喩を以て如何にしても救われぬ衆生のあることを『涅槃經』の中には積極的に説いているのである。徳一はこのように

主張して一乗成仏という説を断乎として斥けた。徳一のような法相宗の立場からすれば、二乗が成仏できぬだけでなく一闍提の徒も成仏できぬというのであるから、成仏できるというのは菩薩種姓と不定種姓という限られた者のみということになる。然し、自分は正に菩薩種姓の者であり成仏疑ないと公言し得る者がどこにあらうか。二乗として排斥される者は、実は修道して煩惱を断じた者である。それすら成仏できぬと言われる。一闍提は断善根・信不具足の徒と非難されるが、果して私自身は信根具定して成仏の確信を持つことができるかどうか。伝教大師と徳一との論争は経論を博引し論拠を数え上げての激しさであったが、それは何も彼等が学問を尙うための場ではなかった。唯識仏教の精密な理論に忠実ならんとする学徒と、信仰上仏力を仰がずにおられぬ宗教者との一歩も退けぬ激突であったのである。

この争は伝教大師の『守護国界章』の中に、ありありと展開された。我々は今その中のほんの数章を披見しただけでも『涅槃経』が如何に両陣營から強く自説の保証とされているかを窺われる。論争は更に長く後人によって継承せられた。その中で最も著名なのが恵心僧都の『一乗要決』である。恵心僧都は『一乗要決』の巻頭に法華によって一乗を論証した後、次にそれ以外の教によって二乗作仏を論証すると言い、多く『涅槃経』の文を引用した。又すべての衆生は皆仏性があるて成仏するということを、唐の法宝は六經二論によって証明したが自分は更に十二文を提出すると言い、十二文中八文は『涅槃経』の中から引用している。その他法相宗の人が五姓各別の証拠として引いた『涅槃経』の文を会釈する場合も少なくないから、いずれにしても『一乗要決』は『涅槃経』の解釈をめぐって、再び法相宗に対する決戦をいんだものと言ってよい。恵心僧都は専ら『往生要集』の著者として知られているが、若し『一乗要決』で主張されているような一乗成仏の根拠が成立せぬならば浄土往生も何もあつたものではない。『一乗要決』は三乘一乗権実の会釈という方向で論ぜられ、『往生要集』は往生の論証という形で叙述されているから、前者が三乗思想に対する論戦で後者が往生未信者に

対する説得というような外観上の不同は感ぜられるとしても、両者は強い信の一線を以て貫かれておる。互に不可分で『往生要集』は『一乗要決』の上に初めて可能な地盤をおき、『一乗要決』は又『往生要集』を通してのみ眞の肉付けがなされていると言えるであろう。私の表現が甚だ疎雑で申訳ないが、『一乗要決』を離れては『往生要集』の根柢が成立たぬことを了解されたならば、『涅槃経』と浄土教との関係が日本の仏教史上、如何に深い繋がりを持つものであるか、既に多言を要しないことと思う。

三

次に天台宗の中で『涅槃経』が『法華経』とどんな関係におかれていたかを考えてみる。親鸞聖人も法然上人も比叡山に学ばれ、比叡山は天台宗である。そして言うまでもなく天台宗は『法華経』を以て眞実の教と見、仏一代の教説は華嚴時・阿含時・方等時・般若時・法華涅槃時と次第すると説く。即ち成道以来四十余年間は種々の教法を説かれたが、それらは終局的には法華一乗へ引き入れるのが目的であったから『法華経』こそが如来の出世本懐の経だといふのである。『法華経』に対する見方は、中国でも多くの高僧により種々の見解が提出されたが、この天台大師智顛の所謂五時教判は、化儀の四教・化法の四教という形式・内容の両面からの分析を経て巧妙に組み立てられたものであるから、後世に大いに信奉せられた。伝教大師最澄はこれを天台法華宗と称し、天台の説に随って『法華経』を正依とする宗だと言っているのであるが、伝教大師をしてこの説に入らせたもとは、華嚴宗の賢首大師法蔵の著述である『起信論義記』や『華嚴五教章』を読んだところ、その中に天台を以て指南としていることを知ったからであった。天台宗の後に法相宗が興り、法相宗の後に華嚴宗が興った。天台宗の後に興った法相宗がどんなに五姓各別を説こうとも、その法相宗の後に興った華嚴宗が一乗成仏を力説し而かも古い天台大師の説を尊敬しているというのであるから、比叡山の人々にとって法相宗との争

がどんなに盛になろうとも、心理的に、味方には強い支持があるという心強さを覚えしめたに相違ない。話は少々それだが、ともかく天台宗は『法華経』を以て最高の教とし、仏陀の教は一応これを以て完成したと見る。但し、仏陀の在世にあつても『法華経』を聞きもらした者があること、及び仏滅後の者は御弟子たちのように華嚴・阿含・方等・般若という順序を経て訓育されるということがないから、そういうものたちをどうすべきか。仏陀の滅後には正法が乱れて破戒無慚、不信非法の者も起るであろう。そういう者に対しても何等かの教が用意されていなければなるまい。そこで、仏陀は原則的には『法華経』を以て教は完成したのであるが前記のように聞きもらしたという在世の例外の者と仏滅後の親しく教を受けることのできぬ者とのために、懇切な配慮を以て最後の教を説いておかれる必要があつた。『涅槃経』こそは実にそうした意図を以て説かれたものであるという。これが天台宗の『涅槃経』観であつた。法華の一乗は『涅槃経』に於て悉有仏性と説かれ、法華の久遠実成は『涅槃経』に於て如来常住と説かれている。そうしてみると両者の間に何等の優劣はない。同醍醐味である。唯だその目的対象が異るといふに過ぎない。

この天台宗の『涅槃経』観によれば、仏滅後の正法衰微を説く経説が末法の自覚を持つまじめな仏教徒の心に切々と訴えずにはおかなかつた。正法を尊重せよ、護法ためには命をも捨てよ、と説かれている。日蓮上人はその方に心が動かされた。然し比叡山に於ける生活を自己の内心にまで立ち入ってふりかえる時『涅槃経』は単に護法を求めただけであらうか、その中に度し難い一闍提として非難せられている者は実は自分の姿ではないか、それがまぎれもない自己の姿であるとするならば『涅槃経』は果して一闍提を責めるだけに終つていいのか、それとも一闍提にも救いの道が開かれているというのか。こうした疑問は天台宗の教を忠実に学び、比叡山の現状を他人事として傍観するのではなく、自分の求道という場に立つてみつめた時、どうしても不問に附しておくことができなかつたであらう。法然上人や親鸞聖人の信仰は直ちにのおのずから恵心僧都や善導大師に結

びついたというのではなく、そこへ結びつかないではおかせなかつた以上のような背景に思いを馳せたいと思う。

四

次に浄土教と『涅槃經』との間にはどんな結びつきがあつたかというに、七祖の中で龍樹と世親の二菩薩については、その聖教の中から『涅槃經』の影響を見出すことはできない。曇鸞大師にしても、『浄土論註』の中に、確かに『涅槃經』から思想的な感化を受けられたと見なければならぬような痕跡は見出されぬように思う。然し道綽禪師になると、明白に両者の内面的な関係がたどられるようになってきた。禪師は出家の後『涅槃經』の弘伝を専らにし、講讚すること二十四遍であつたと言われる。当時は南北共に『涅槃經』の研究が盛であつたが、北方では僧統慧光の門下から多くの涅槃學者を輩出した。中でも法上は最も著名であり、法上の弟子の慧遠・靈祐は、国統となつた曇延等と並んで『涅槃經』に対する深い造詣を以て知られていた。然も彼等は北周の廢仏を身を以て体験し『涅槃經』に憂慮せられた法滅時の様相は、現実に仏教界を襲うに至っている。末法思想はこの時に起つて強く人の心を動かし、浄土願生の信仰はこれを機会に改めて仏教者の修道の在り方を反省せしめずにはおかなかつた。而してこうした体験と信仰が道綽禪師に於て凝集したのである。『涅槃經』には悉有仏性と云いつつ種々の行法が説かれるけれども、その『涅槃經』にも念仏三昧を勧められており、時と機と教との相応を考慮すれば浄土願生以外に道のないことが道綽禪師に於てはつきりさせられた。「一切、衆生皆仏性ありと雖も、大聖を去ること遙遠なると、理深解微なるとに由り、聖道門の教によつては今時証し難し」と断言せられたのがそれであり、そういう心境にあつた道綽禪師をして、唯有浄土一門の通入すべき路であることを知らしめたのが、曇鸞大師の『浄土論註』であつた。このように見ると、前から曇鸞大師の『浄土論註』があつたとしても、それを起惡造罪の凡夫の宗教として力強く受けとめさせたものが『涅槃

經」とその時代とであつたことを否定できぬであらう。

善導大師における罪業觀も、私は確かに『涅槃經』の影響に由るものと信ずる。我々はその撰述中において明示せられた經文の引用のみを以て、その影響を論ずべきでなからう。例せば『觀經疏』中に阿闍世王を説く場合の諸文の如き、經名は明示せられていなくても、そこに『涅槃經』が精統され、その中にこの經を通して限らない罪惡感が読みとられていることを感じぬわけにはいかぬ。そうだとすれば、罪惡の最も深い者が信根不具の一闍提であることに想到し、そういう一闍提を『涅槃經』では厳しく責められながら、遂にはその成仏を認められるに至つた根拠をつきとめないでおかれたとは考えられぬ。私は今ここに一々文を指摘してそれを論証しようとは思わぬが、仏の願力をおいて他に求められなかつたのは当然である。『法華經』に「三界火宅は居止し難し、仏の願力に乗じて西方に往く」とあるのが『法華經』を予想し、「無勝莊嚴の釈迦仏、我が微心を受けて道場に入りたまえ」とあるのが涅槃經を予想する。「五逆と十惡と罪滅して生ずることを得、謗法と闍提と廻心して皆往く」とあるのは、闍提が罪惡深重ながら仏の願力によって救われることを『涅槃經』によって確認せられたと解釈する外ない。淨土教の惡人正機説が如何にして一闍提の成仏思想と切りはなして考えられようか。天台宗とか日本仏教の伝統というものはなれても、淨土教學が『涅槃經』の闍提成仏説と密接不可分の關係を持つていたことを知られるであらう。

五

日本の仏教思想史の上で『涅槃經』は何宗に限らず、凡そ成仏を論ずる限り、どんな人も一度は真剣に考えねばならぬものであつた。その上、天台宗では『法華經』と同醍醐味の法であり、仏滅後の衆生のための懇切な遺誡であるというのであるから、親鸞聖人は比叡山に在られた時からこの經に強く心惹かれておられたに相

違ない。仏の出世本懐が一切衆生を救うにある以上、諸経の中では多く度し難いとせられている二乗も終には成仏させられることが『法華経』によって知らされ、悉有仏性とは云え此だけは成仏不可能と斥けられた一闍提が終には成仏させられることが『涅槃経』によって教えられた。こうして聖人の胸裡にはそのような慈悲本願の本仏を求める心が次第に強まり高まった時、太子の示教という形で法然上人に逢い、浄土の教を聞いて忽ちに阿弥陀仏の願力こそそれらの諸経が説き示す所であることに決断ができたのであった。こうして聖人は、叡山の僧衆には同調できずして山を下りられたけども、山を下りさせたのは伝教大師以来脈々と流れる一乘仏教の精神であり、末法法滅の時を自覚させた天台宗の『涅槃経』観であった。そしてその根柢の上に遇い得た善導大師の教は、闍提成仏が仏の願力に由ることを知らせて、浄土往生は実に仏教の一角だけで受け入れられる説ではなく、一代諸教の帰結であることを知らせたのである。今私は聖人が『教行信証』六巻の中に引用せられた個々の経文について紹介したり、所見を述べようとは思わぬ。往年曾って『観鸞聖人論攷』第三号誌上に発表した所であるけれども、最も顕著な聖人独自の見識を窺わせる次の一文を、再びここに略述してこの稿を終ることにしたい。

『涅槃経』の『現病品』に三種病人の説がある。看病人や随意の医薬があれば治癒するが、それらがなければ治癒できぬ病人とそれがあろうとなかろうとどちらにしても治癒することのできぬ必死不可治の病人と、及びそれがあろうとなかろうとどちらにしても治癒することのできる病人と、この三種の人がある。その中第一の者は声聞縁覚であり、第二の者は大乘を誘る者・五逆罪の者及び一闍提であって、第三の者は『涅槃経』の修行者であるとせられている。この文よりして、法相宗の如きは、その第二の者を以て、仏教中に不成仏の機ある明証としているのであり、極めて重大な説である。天台宗では、これは仏の無病行処と対弁するためであり、真にこれらの者が不成仏であることを主張したものとはしない。そして、一闍提は如何にも蔽に斥けらる

べきであるが、彼等と雖も若し善心を生ずれば一闍提ではなくなるから、その意味で『涅槃經』中闍提作仏を明言する文があるとし、闍提の改悔生信まで絶対に不可能だと言っているのではないとする。然しそれは天台宗が經の前後を見通しての解釈であり、經のその所の文だけを見るならば何としても闍提の不成仏を明言していることを認めねばならぬのである。然るに、親鸞聖人は『教行信証』の「信卷」にこの文を引用しながら、文の順序を変更して三種病人の文を前後混同して引くと共に訓点まで全く独自の見解を以て施し、原文とは異なる意味に解釈せられた。即ち經によれば、謗大乘と五逆罪と一闍提とは看病人や医薬があってもなくてもきつと治すことのできぬようなものであつて、必ず死すること疑なしと説かれてはいるに拘らず、聖人は此を次のように読まれた。謗大乘と五逆罪と一闍提とは必死で治らぬものであるが、それが看病人や医薬があるようなものである。若し看病人や医薬がないならば、必ず死すること疑ない、と。これは原文を訓読する時、どうい文法的に言つてあり得ない読み方であり理解であつて、一往不可解というの外ない。更に又『經』の原文では、以上の三病人は、声聞・緣覺・菩薩では治すことのできぬ所だと説かれ、それに対して声聞・緣覺は若し仏・菩薩から法を聞き得たならば菩提心を発すが、若し法を聞かなかつたならば発心し得ないと説かれている。然るに聖人はこの所の文を入れて、前の三病人は声聞・緣覺・菩薩の方では治すことができぬが、仏・菩薩に従つて聞治を得たならば菩提心を発すことができる。声聞・緣覺・菩薩からは、たとい説法を聞いても聞かなくても菩提心を発すことができぬ、と。ここに至つては明かに經文の加減変更であつて、訓読の独断以上に、奔放不軌であるとさえ評されよう。従つて如何に信仰に立つての理解とは言えそこまでの自由が仏教徒として許されてよいかどうか、確かに問題になると思う。

この難関に當つて私には、それがこゝを殊更に聖人により自分に都合のよいように訓読と加減を施されたものとは考えられぬ。『涅槃經』の片言隻語だけを読まれたものならばともかく、全卷に亘つて精読し字句の解

釈には特別に周到な配慮をせられた方である。そうした聖人に、どうしてそのような不遜放恣な態度があり得ようか。ここで私は、この問題解決のために、我々自身が『涅槃經』全体を始から終まで慎重に読み通さなければならぬということを感じする。『涅槃經』の中には、初に闍提不成仏を力説し、終の方に至って闍提成仏となっている。同じ『經』の中にどうしてそのような矛盾の説がなされ得たか。これは研究者・信仰者にとって最大の課題である。こうした矛盾あるために一乗説の根柢ともなれば、三乗説論証の經説ともせられる。天台宗では闍提は如何にもそのままでは不成仏だが、改悔して信を生ずれば成仏するとして、不成仏というも眞実だが、成仏というも眞実だとした。然しそれならば、謗法不信の一闍提が如何にして改悔し信を生ずるようになるか。天台宗の考も実はそこまで追求しなければ徹底せぬのであるが、天台宗では、別教と円教という自宗独自の教判でここを説明するに止め、闍提が如何にして闍提の地位を脱するかという方向に思を凝らすことをしなかつた。そこには教相判釈という理論が主要な課題であつて、自らを一闍提と覺つて自己の罪業深重に自覚めることが忘れられた爲ではなからうか。『涅槃經』は之を細心に読めば、仏菩薩が大慈悲を以て、自らは改悔し發菩提心する筈のない一闍提に対し、どこまでも追いかけて救わずんば止まぬということを説かれてゐる。そういうことは阿弥陀仏の本願力に徹した人に於てのみ、注意され看取される所である。「決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常没常流轉して出離の縁あることなしと信ずる」衆生であつてこそ、「決定して深く、彼の阿弥陀仏は四十八願を以て衆生を摂受したもう、疑なく慮なく彼の願力に乗じて定んで往生を得と信ずる」ことができよう。この阿弥陀仏の願力を信ずる者の立場に立てば『涅槃經』に於ても「闍提が改悔すれば成仏す」と説くだけで「闍提が如何なる力を蒙つて改悔し信を生ずるか」それを説かれぬ筈はないことが知られよう。そうして、それは梵行品の中に阿闍世王歸仏の縁を通して明示されていることを、聖人は血涙を以て読みとられたのである。実に弥陀の本願を領受された聖人であつたからこそ『涅槃

槃經』の底に流れる温い大慈悲心が汲みとられたのである。或は『涅槃經』の天台宗的理解にあきたらずして、その矛盾の会通と会通説の不徹底とを追求してゆかれた結果が、弥陀大悲の願力へ行きつかせたというように見るのが本当かも知れぬが、いずれにせよ以上のように見て来た私には『涅槃經』は聖人によって歪めて解釈されたのでなく、聖人を俟って始めて『涅槃經』の深意が明かにされたと思うのである。

親鸞聖人が比叡山で学ばれたのは何であつたか。天台宗では五時の教判を立てて法華涅槃を真実至極の教とし、その教に基づいて四種三昧の修行をせよと教えられてきた。然し己が機根を顧みれば、法華三昧にせよ常行三昧にせよとも如法に修せられる身とは思えない。それどころか『涅槃經』には末世法滅時のありさまが詳述せられ、度し難い一闍提の罪の深さがきびしく追及されているのに、山の生活は正しく法滅時の様相を呈し、自己自身の姿は一闍提そのものではないか。聖人は恐らくこうした疑問を生じて法華と涅槃とを繰り返して読みかえされたことであろう。『法華經』は果して四種三昧の修行を我々に要求しているのか。『涅槃經』は持戒清浄でなければ救われぬとして梵行を命じているのであろうか。天台宗で最高の教と説くこの二經をも一度天台の立場を離れて読みなおしてみると、『法華經』には、一切衆生を救うのが如来の出世本懐だから、地獄に墮するよりも恐るべきこととせられた二乘地の者が仏の本願によって救われると説かれていた。又『涅槃經』には必死不可治の機として全く救いの道のないとされる一闍提さえ、仏の大悲は見捨てることがないと言われていた。そしてそうした大悲本願の主を『法華經』には久遠実成の仏だといひ、『涅槃經』には寿命長遠の仏だという。そうだとすればそうした寿命長遠の仏が一闍提の者までも救われるということの具体的な道を説いた經がないはずはなからう。聖人をして山を下りて六角堂に祈らせたものは、正しくこうした疑問が湧いてそれに堪えられなくなつたためだと思われる。かくて聖人にとつて、念仏への道を開いたものは法華と涅槃であり、それに決定を示したのが法然上人であつたと考えられるのである。